

井上ひさし「握手」あらすじと要点 (期末テスト対策ポイント)

井上ひさし「握手」あらすじ

「握手」あらすじ

「わたし」とルロイ修道士は、上野公園にある西洋料理店で再会した。
今度故郷(くに)へ帰ることになったので、“天使園”の皆に会ってまわっているという。

ルロイ修道士が大きな手を差し出す。「わたし」は天使の十戒「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず」を思い出す。彼の握力は万力よりも強いのだ。
しかし、実際は穏やかな握手だった。

ルロイ先生の左の人さし指は相変わらず不思議なかつこうだ。戦争中、日本人の監督官に木槌でたたき潰されたからだ。
しかしルロイ先生は日本人を憎むのではなく、天使園のこどもたちのために泥だらけになって野菜を作り、鳥を育てていた。

「日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる。それだけのことですから。」と、彼は言う。

そんな先生にも、かつて一度だけ「わたし」はぶたれたことがある。無断で天使園を抜け出して東京へ行ったときだ。

ルロイ修道士の両手の人さし指をせわしく交差させる姿が脳裏に浮かぶ。
これは危険信号だった。「おまえは悪い子だ」とどなっているのだ。

ルロイ修道士は、目の前にあるプレーンオムレツをちっとも口へは運んでいない。
どこかお悪いんですか。と聞いても、疲れただけと答える先生だが、遺言のようなことを口にするし、なにより握手が穏やかだったのは、病気だからなのではないか。
この世のいとまごいに、かつての園児を訪ねて歩いているのではないか。

「天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしているのを見るときが
いっとう楽しい」と先生は語る。



別れするとき、「わたし」は思い切って聞いた。「死ぬのは怖くありませんか。」
「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」と先生は答えた。

「わたし」は右の親指を立てる。それは「わかった・よし・最高だ」という代わりにする、ルロイ修道士の癖だった。

それからルロイ修道士の手をとって、しっかりと握り、腕を上下に激しく振った。
かつて先生が、はじめて天使園へやってきた「わたし」にしたように。

そしてルロイ修道士はなくなった。

わたしたちに会ってまわっていた頃には、すでに身体中が悪い腫瘍の巣になっていたのだと葬式で聞いた「わたし」は、知らぬ間に両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

「握手」のテスト対策ポイント

1. ルロイ修道士がどういう人物かについて理解しておこう。
2. ルロイ修道士の考え方について理解しておこう。
3. 「わたし」の気持ちについて理解しておこう。

「握手」のテストで大切なのは、ルロイ先生の「人物像」をしっかり理解すること、エピソードや言葉をヒントに、登場人物のこまかい「気持ち」について理解することだよ。



ポイント①

ルロイ修道士とは

ずっと日本で暮らしていて、日本語が上手

ルロイ修道士は第二次対戦直前の昭和十五年の春、日本にやってきて、それからずっと日本暮らし。なので日本語には年季(ねんき)が入って(長い間修練をつんで、確かなウデをしているということ)いるよ。

カナダ出身

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう」というセリフから、カナダ出身ということが分かるね。

「ケベック郊外の農場の五男坊」とも書かれているよ。

光ヶ丘天使園の園長

そしてルロイ修道士は、光ヶ丘天使園という児童養護施設の園長を務めていたよ。

人さし指が不思議なかつこう

ルロイ修道士が日本にやってきて2年しないうちに戦争が始まって、ルロイ修道士は丹沢の山の中で「みかんと足柄茶」を作らされた。

その時、「日曜日は休ませてほしい」と監督官にうったえたところ、見せしめに左の人さし指を木づちで思い切りたたき潰されてしまったよ。

だから、ルロイ修道士の左の人さし指は「不思議なかつこう」なんだね。

握力は万力(まんりき)よりも強い

万力というのは、材料を強い力ではさんで固定する工具のこと。

ルロイ先生の握力はとても強くて、しかも腕を勢いよく上下させるので、「天使の十戒(天使園で子



供たちが考えた 10 のルール)」には「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず」というルールがあるんだね。

ルロイ先生と握手をしてしまうと、二、三日は鉛筆が握れなくなってしまうかも、と子供たちには言われてしまっているね。



「わたし」との関係

「わたし」は中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、光ヶ丘天使園に入所していたね。ルロイ修道士は、光ヶ丘天使園の園長で、「わたし」が入所したときに迎えてくれて、力強い握手をしたね。

「わたし」が高校二年のクリスマスの日、無断で天使園を抜け出して東京へ行ってしまった時には、ルロイ修道士に一度だけぶたれているよ。



ルロイ修道士の指言葉



ルロイ修道士は、指を使って気持ちを伝える癖があったね。

右の親指をぴんと立てる

これは「わかった。」「よし。」「最高だ。」という意味。
「握手」では、4回登場するよ。

1. ルロイ修道士がオムレツを「おいしい」と言ったとき
2. 「わたし」の仕事が「まあまあうまくいっている」と聞いたとき
3. 市営バスの運転手の上川君が、「ルロイ修道士がバスに乗ると合図をする」という話をしたとき
4. ルロイ修道士が「天国があると信じる方が楽しい」と言って、「わたし」がわかったと答える代わりにしたとき(このときは「わたし」が指言葉をしている)

右の人さし指をぴんと立てる

これは「こら。」「よく聞きなさい。」という意味。

「わたし」が、戦争中に監督官がルロイ修道士に対してヒドイことをしたことを謝ったときに、登場するよ。



両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつける

これは「おまえは悪い子だ。」という意味。

3回登場するよ。

1. 「わたし」が天使園を抜け出して東京へ行ってしまったとき（指言葉をしたとはハッキリ書かれていないけれど、平手打ちをされたことは書いてあるよ。平手打ちの前に、指言葉もしたと読み取れるね。）
2. 「わたし」がどうやって東京見物の費用をひねり出したかをきいたとき（でも、このときは顔は笑っているよ）
3. ルロイ修道士が、かつての天使園の園児たちに会って回っていた頃には、もう身体中が悪い腫瘍の巣になっていたとわかったとき（「わたし」が指言葉をしている）

右の人さし指に中指をからめて揚げる

これは「幸運を祈る」「しっかりおやり」という意味。

ルロイ修道士が、上野駅の中央改札口で「わたし」と別れるときに登場したよ。

ポイント②

ルロイ修道士の考え方

物語の中では、ルロイ修道士が「どういう考え方をする人か」がわかるセリフや描写がいくつかあるよ。

わたしが天使園にやってきたとき

「わたし」が天使園にはじめてやってきたときのルロイ修道士のセリフ

「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」。

このセリフからは、児童養護施設にやってくるようになった「わたし」の不安な気持ちをやわらげる、ルロイ修道士の「優しい・愛情深い」人柄がわかるね。



天使園でのルロイ修道士の様子

「園長でありながら、ルロイ修道士は訪問客との会見やデスクワークを避けていた。たいていは裏の畑や鶏舎にいて、子供たちの食料を作ることに精を出していた。」

この描写からは、園長という地位や世間体（せけんてい・世の中や周りにいる人に対してのミエのこと）よりも、子供たちが栄養のあるものを十分に食べられるように、子供たちのために働くことを優先させる、ルロイ修道士の「愛情深い・誠実な」人柄わかるね。

さらに、

「ルロイ先生はいつまでたっても優しくかった。そればかりかルロイ先生は、戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために、泥だらけになって野菜を作り鶏を育てている。」

戦争中、ルロイ修道士は日本人の監督官に木づちで指をたたき潰されてしまっているよね。それなのに、日本人を憎むでもなく、それどころかその日本人の子供たちのために働いているルロイ修道士の描写からは、「人種で差別したりすることなく、平等に愛情を与えられる」ルロイ修道士の人柄が読み取れるよ。

丹沢の山の中で働いていたときの様子

「カトリック者は日曜日の労働を戒律で禁じられているので、ルロイ修道士が代表となって監督官に、『日曜日は休ませてほしい。その埋め合わせは、他の曜日にきつとする。』と申し入れた。」

監督官に申し入れをするなんて、勇気がいるよね。じっさい、ルロイ修道士は見せしめに木づちで指を叩き潰されてしまったよね。

でも、他の修道士たちのためにルロイ修道士は代表で申し入れをしたんだね。

それに、ただ「日曜日は休ませて」と頼むのではなく、「埋め合わせを他の曜日にきつとする。」というセリフからは、ルロイ修道士の「誠実な・責任感のある」人柄がわかるね。

「わたし」が日本人として謝ったときのセリフ

戦争中に、監督官がルロイ修道士にひどいことをしたことについて、「わたし」が謝ったときのセリフ「日本人を代表してものを言ったりするのは傲慢（ごうまん）です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる。それだけのことですから。」。



傲慢というのは、「思い上がった」という意味。

このセリフからは、人は本来みんな「平等」であるべきで、自分が「代表」であるかのようにものを言うのは、「思い上がりだよ」とルロイ修道士が考えていることがわかるね。

「日本人だから」とか「アメリカ人だから」と、人種で区切ってしまうのは、偏見（へんけん・かたよったものの見方）や思い込みにつながって、罪のない人を傷つけることもあるよね。

戦争だって、「〇〇人だから」という理由だけで、罪もない子供が巻き込まれて亡くなってしまうことがあるよね。

ルロイ修道士は、「人種で人を分けてはいけない。みな、同じ『人間』であり、平等なのだ」と考えていることがわかるね。

「いっとう楽しいとき」についてのセリフ

「わたし」がルロイ修道士に「日本で暮らしていて楽しかったことは？」と聞いたときの修道士のセリフ

「天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしているのを見るとき」「何よりもうれしい」。

天使園で育った上川君も、立派なバスの運転手になっていて、ルロイ修道士がバスに乗ると、ルロイ修道士の癖をマネして親指をぴんと立てたり、天使園の正門前にバスを停めてしまったりして、ルロイ修道士を楽しませているね。

自分の園で育てた子供たちが、無事に幸せな人生を送って、きちんと世の中の役に立っているということが、ルロイ修道士にとって一番楽しいことなんだね。

これって、お父さんお母さんが、子供に対して思う気持ちと同じだよな。

このセリフからは、ルロイ修道士の子供たちに対する「深い愛情」が伝わってくるね。

ポイント③

「わたし」の気持ち

ルロイ修道士の身体を心配する気持ち

ルロイ修道士が、オムレツをちっとも口へ運んでいないことに気がついた「わたし」は、「あれ？おかしいな？」と思い始めたね。

そして、とうとう食べないままナプキンを折り畳んでしまったので、「食事はもうおしまいなのだろうか」と心配しているよ。



「カナダへたつ頃は、前のような大食らいに戻っていますよ。」とルロイ修道士が言ったときも、「だったらいいのですが…。」と、先生が本当に元気なのかどうか、安心しきれなくて、納得がいかない気持ち表れているよ。

そしてとうとうルロイ修道士が「困難は分割せよ。この言葉を忘れないで」と話すと、冗談じゃない、これではまるで遺言ではないか、と、やはり「ルロイ修道士は病気なのではないか」と真剣に心配し始める。

そして、再会したときの握手がやけに穏やかだったのも、先生が病気だったからなのではないかと考えているね。

ルロイ修道士との別れを惜しみ、感謝を伝えようとする気持ち

「わたし」は、ルロイ修道士と別れるときに、ルロイ修道士の指言葉をマネして、そして手をしっかり握り、腕を上下に激しく振っているね。

「わたし」は、ルロイ修道士が重い病気にかかっている、いとまごい（別れのあいさつ）のために天使園の子供たちのところをまわっていると気がついてしまった。

先生が心配で、そして先生を失いたくないと思っても、ルロイ修道士はしっかりと自分の「死」に向き合っている、全てを受け入れようとしている。

だから「わたし」にできることは、ルロイ修道士の指言葉と、ルロイ修道士がしてきたような力強い握手をすることで、死に立ち向かおうとしているルロイ修道士を励まして、そしてルロイ修道士への感謝の思いをけんめいに伝えようとしているんだね。

何もできなかった自分への怒りの気持ちと、やるせなさ

そして最後、ルロイ修道士がなくなったあと、実は「わたし」のところにルロイ修道士が訪ねてきたときにはもう身体中が悪い腫瘍の巣になっていたと知ったとき。

「わたし」は、「知らぬ間に」両手の人さし指を交差させて、せわしく打ちつけていたね。

これは、ルロイ修道士の指ことばで、「おまえは悪い子だ」という意味だったね。

物語の中でハッキリとは書かれていないけれど、これは「重い病気だったルロイ修道士に対して、自分は何もできなかった」ことに対する、自分への怒りや無念さ、「病気によってルロイ修道士が亡くなってしまったことへの“やるせなさ”や悔しさ」が、そうさせてしまっているのではないかな。



語句の意味と新出漢字

新出漢字

※2021年に改定される前の教科書に載っていた新出漢字です。
最新の教科書を持っている場合は、そちらも合わせて確認してください。

濯	洗濯(せんたく)・濯(すす)ぐ
稔	稔(おだ)やか・稔健(おんけん)
鷄	鷄(にわとり)・鷄舎(けいしゃ)
爪	爪楊枝(つまようじ)・爪を切る
墾	墾田(こんでん)
監	監督官(かんとくかん)・監査(かんさ)
督	家督(かどく)
帝	帝王・帝(みかど)
泥	泥水(どろみず)・泥岩(でいがん)
傲	傲然(ごうぜん)
搜	搜(さが)す・捜査
冗	冗長(じょうちょう)・冗談
姓	姓名・同姓
忌	忌中(きちゅう)・忌(い)まわしい

語句の意味

※「握手」で使われている場合の意味について紹介しています。
赤字のものはテストに出る可能性が高いので、意味と使い方をよく確認しておこう。

修道士	キリスト教の宗派のひとつ「カトリック」で修行する人。
達者	上手なこと。
年季が入る	長い間修練をつんで、確かなウデをしているということ。
気前がいい	お金や物を出し惜しみしないこと。ケチケチしていないこと。
第二次大戦	1939年に始まった第二次世界大戦のこと。
天使の十戒	天使園で決められていた十ヶ条の戒(いまし)めのこと。
児童養護施設	保護者がいない児童が入所する施設。



聖人伝	徳の高い人に与えられる称号のこと。
ケベック	カナダ南東部の都市の名前。
プレーンオムレツ	具を入れずに、溶いた卵だけをバターで焼いた料理のこと。
交換船	第二次大戦で戦っている国同士が、お互いの捕虜や、とどまっている人を交換するために派遣する船のこと。
精を出す	精いっぱい働くこと。 【例】仕事に精を出す。
奇妙	普通の考え方ではわからないような不思議なこと。
丹沢	神奈川県北西部から静岡・山梨両県の一部にまたがる丹沢山地。
足柄茶	丹沢山地のある神奈川県足柄上郡などを産地とするお茶の名前。
戒律	宗教で、人が守らなければいけないとされているルールのこと。
月月火水木金金	土曜日が金曜日に、日曜日が月曜日になっていて、つまり土日のお休みもなく訓練に励むという意味で使われた言葉。
国際法	国と国の間で作られた法律のこと。
…のわりに	ものごとの「基準」と「実際」が釣りあわないこと。 例えば、年齢の基準にくらべて見た目が若く見える場合、「年齢のわりに若く見える」というように使う。
有楽町や浅草	東京都内の地名。
闇市	第二次世界大戦のころ、日本の各地で開かれていた市場で、正式に決められている価格や、販売ルートに関係なく商品の売買が行われていた。
せわしい	いそがしい様子。全力で走った後などに、息を早く、いそがしくする場合、「せわしく息をつく」というように使う。
こたえる	外からの刺激を身に強く感じること。 寒さがとてもツライ場合、「寒さが身にこたえる」というように使う。
地道	まじめに、着実に進む態度のこと。 コツコツと毎日勉強してテストで良い点をとった場合、「地道な勉強によってテストで良い点を取った」というように使う。
いとまごい	別れをつけること。
平凡	ふつうであること。 対義語は、非凡(ひぼん)。
腕前	能力の程度のこと。つまり、どのくらい上手いか、というイメージ。 「腕が立つ」は「技術が優れている」こと。 「腕によりをかける」は「持っている腕前を十分に発揮して頑張る」こと。 「腕を振るう」は、「自分の腕前を人に見せる」こと。 料理が得意な人が、人前で料理の腕前を見せる場合、「腕を振るって料理する」というように使う。
むやみに	後先を考えないで行動すること。 【例】この薬には副作用があるので、むやみに飲まないこと。
一周忌	なくなっ一年後の命日のこと。



「握手」テスト対策まとめ

「握手」まとめ

- 作者は井上ひさし
- ルロイ修道士の人柄を整理しよう
- ルロイ修道士の考え方を整理しよう
- 新出漢字をおさえよう
- 登場する言葉の意味を確認しよう

